

特集 近世近代移行期の海域世界と国家

序

複数の世界が存在した前近代から一つの世界が観念されだす近代への移行は、国際関係をはじめ海域秩序や人間関係に大きな変化をもたらした。本特集「近世近代移行期の海域世界と国家」は、その過程において国家間や異文化間を仲介し、近代の創出に関与した存在に光を当てる。国民国家を基盤とする近代国際秩序が様々な確執を生んでいる今日、かつて異なる集団間の交流を担った存在が注目を浴びている。海域と陸域を往来した移動民、奴隷と総称された隷属者、内と外の境界的存在などはその代表であった。本特集はそうした存在に着目することで、前近代と近代を媒介的に捉えることをねらいとする。

本特集のもとになったのは、二〇一六年六月二五日（土）に開催された立教大学史学会大会での同タイトルのシンポジウムである。多くの参加者で盛会となった当日の報告をもとに、三本の論文とコメントリー一本を得た。

弘末雅士

近代の国家や国際関係を構築する上で、「海賊」とよばれた集団は重要な役割を担った。越村勲「アドリア海の海賊ウスコクから見た近世の国家形成」は、海賊を「最初のグローバル化」と「近世帝国」に対する民衆の反抗形態と捉える。一六世紀のアドリア海は、オスマン帝国、ハプスブルク帝国、ヴェネツィアの三勢力がせめぎ合った。こうしたなかでオスマン軍に襲撃されたハプスブルク帝国の人々やオスマン帝国の支配を逃れてきた避難民の多くが、国境の守備兵となった。ただしハプスブルク帝国もオスマン帝国も、彼らに十分な報酬を支給できなかった。こうしたなかで彼らは海賊となり、内陸部でもしばしば略奪行為を働き、ウスコクと呼ばれた。彼らの行為を両帝国も、ある程度容認せざるを得なかった。やがて一七世紀に両帝国の拡張政策が限界を迎え、両国間の関係が安定すると、ウスコフはその役割を終える。なお同じ頃、東アジアでも倭

寇と呼ばれた集団が活動した。近世近代移行期の国際秩序の形成と海賊の関係が提示された。

奴隷は近代移行期において重要な労働力であり、社会統合に欠かせぬ存在であった。鈴木英明「インド洋西海域周辺諸社会における近世・近代移行期とその矛盾―奴隷制・奴隷交易の展開に着目して―」は、奴隷を集团的階層として一義的に捉えるのではなく、彼らと主人との関係やホスト社会のなかでの位置づけを重視する。近代移行期にこの海域世界で、奴隷をめぐる矛盾を抱えたまま近代が展開したことが明らかされる。この時期、農園企業で多数の奴隷が労働力として必要とされたが、イギリスの政策により、奴隷貿易は後退を余儀なくされた。代わりに契約労働者が導入されたが、彼らは厳しい労働環境に置かれた。また奴隷解放後には元奴隷が、そうした労働を担うことも少なくなかった。こうした契約労働者や元奴隷たちは、当該社会を構成する多数派となった。元奴隷たちは解放後もほとんどが出身地に帰りたがらず、以前の主人のもとに留まることが多かった。

近代国際関係の成立とともに、それまで隣接勢力との仲介役であった境界的存在は、その役割を大きく変容させた。木村直也「日朝関係の近代の変容と境界領域―明治維新期の対馬を中心に―」は、近世に朝鮮と交流した対馬が、幕末・

明治初期に朝鮮と日本の間で活発に活動することで、結果的にその役割を後退させたことを明らかにする。幕末期に対馬は、イギリスやロシア船の来航に対処しつつ、朝鮮王朝との仲介役の重要性を江戸幕府に訴え、経済的支援を得た。明治への移行期にも、日本の意向に従わない朝鮮に対し、自らの役割の重要性を保持しつつ、対馬は新政府から支援を得ようとした。新政府もその訴えを受け入れた。しかし、それにより新政府の介入が強まり、廃藩置県のものち対馬藩はなくなった。朝鮮問題の重要性を訴えることには成功したが、対馬はその役割を終えた。近代国際秩序の構築に関与しながら、境界的存在が後退していく典型的な事例であろう。

いずれの論考も、近代を導いた原動力を明らかにしつつ、これらの存在が矛盾を抱えながら、近世近代移行期を迎え、そのあとに問題を持ち越していることを示唆する。なおこの時期の東アジアの動向と比較検討するために、荒野泰典にコメントをお願いし、倭寇的状况をめぐる議論や日朝関係、さらに近世の隷属的存在について示唆に富んだ意見をいただいた。本特集が、他地域の事例とも比較検討できる材料となれば幸いである。

（本学文学部教授）